

## 長野県「山の日」懇話会(第1回) 議事録

主催：長野県  
日時：平成25年6月5日(水)午前9時30分正午まで  
場所：長野県庁3階特別会議室

司会（石井康彦林務部森林政策課企画幹）：それでは定刻となりましたので、ただいまから、「長野県の山の日」、(仮称)の制定に関する有識者懇話会を開催いたします。

本日の司会進行を務めさせていただきます、長野県林務部森林政策課の石井と申します。どうぞよろしくお願いたします。

本日の会議につきましては、全て公開とさせていただきますので、よろしくお願いたします。それでは開催に先立ち、阿部知事からあいさつ申し上げます。

阿部守一長野県知事：改めまして、おはようございます。今日は大変お忙しい中、「山の日」懇話会にお集まりをいただきまして、ありがとうございます。

後ほど事務局から、本日の会合の主旨等ご説明をさせていただくこととなりますが、県政全般を考えていく中で、長野県の特色や強みというものを、もっと伸ばしていきたい、発掘していきたい、ということが、新しい「しあわせ信州創造プラン」においても「確かな暮らしが営まれる美しい信州」を目標にしているところでございます。「確かな暮らし」であり、本当に私たちが「守るべき美しき信州」を守ることにつながっていくといった、「強み」というものは、本県にはいろいろあると考えています。

1つは「健康長寿」ということでもあります。例えば「自然環境」の面、あるいは「観光」の面、といった様々な観点から、長野県の貴重な財産の1つは何と言っても私は「山」だと思っています。

もちろん全国の自治体等で様々な視点があり、山梨県あるいは静岡県からみると「富士山」ということになるわけですが、本県の場合は、「北アルプス、中央アルプス、南アルプス」、それ以外にも、美しい山々がたくさんありますし、人々に親しまれてきた身近な山が県内たくさんあるわけです。

さらに県内だけではなく、県外あるいは海外からも人を引きつける要素を強く持っているのが、私たち「信州の山」であると思っています。

そうしたことを考えたときに、現在、国においても「山の日」の制定の動きがあります。超党派の国会議員による議員連盟が発足し、国民の祝日としてみても「海の日」があるのに、「山の日」はないという素朴な疑問もあり、そうした議論も進めたいと思いますし、県としても積極的にコミットしていきたいと思っています。

それと同時に長野県では、何かの記念日というものを制定しておりません。

一方で、他県では、「山の日」という形で既に制定して取り組んでおります。

県としては、ぜひ私達長野県の基本的な価値であり、財産である山に着目し、ぜひ県民の皆様と一緒に山について考え、あるいは山に親しむ、そういうものとして「山の日」というものを考えていく必要があるのではないかと考えており、本日、

皆様にお集まりをいただきまして、ぜひ幅広い御意見を出していただく中で、本県の「山の日」のあり方について、御議論いただきたいと考えているところであります。

後ほど県民の皆様へのアンケートの結果が事務局から報告されますが、山あるいは「山の日」に対して積極的な御意見が多いと感じています。

一方で、中には「山の日」というものに対しての具体的なイメージが持ちにくい、あるいは具体的にどういう意義があるのかということ、しっかり県民の間で共有できるようにしてほしいという御意見もありますので、まずは県民の皆様が、こういうことであれば思いを共有できる、という意義付けのところが重要な議論のポイントと認識しておりますので、単に「山の日です」ということを決めるだけでなく、この懇話会の議論を通じて本当に私達が山の、例えば環境をどういうふうに具体的に守っていくのか、あるいはどういう形で生かしていけばいいのか、といった様々な具体的な取組についても県としてあるいは県民の皆様全体で改めて考えていかなければならないと考えております。

本日は、山に関係する皆様、あるいは山とは直接的には関係がない皆様にも参加いただき、県民として山に対してどう向き合っていけばいいのかということも念頭におきながら「山の日」について、広く御議論を深めていただければありがたいと思っております。会議の冒頭長くなりましたが、私の思いも含めて、あいさつをさせていただきました。

これから、皆様のご意見をしっかり承り、ぜひ、「山の日」の議論を進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。(知事所用により退席)

司会：それでは本日お忙しい中、お集まりいただきました有識者の皆様の御紹介をさせていただきます。お手元の配席図と合わせてご確認くださいと思います。

恐縮ですが、五十音順で紹介させていただきますので、よろしくお願いいたします。(名簿により紹介)

司会：続いて事務局の紹介をさせていただきます。(名簿により紹介)

司会：それでは、本日の懇話会が第1回目となりますので、全体のスケジュールと懇話会の概要等について、塩入林務部長から御説明申し上げます。

塩入茂長野県林務部長：(スケジュール・懇話会概要を説明)

司会：林務部長からの説明にもございましたとおり、この懇話会は皆様から様々な御意見をいただくことを目的としておりますので、御出席の皆様方の中から座長をお願いしたいと考えており、事務局に御一任いただきたいと思っております。

座長には信州大学山岳科学研究所の鈴木所長をお願いしたいと思っております。

鈴木所長、どうぞよろしく願いいたします。

座長（鈴木啓助さん）：それでは、改めまして、皆様おはようございます。

座長を仰せつかりました信州大学の鈴木でございます。

非常に楽しいお題でありながら、かつ難しい「山の日」の制定ということで、皆様に御議論いただきますが、時間が限られておりますので、進行に御協力いただきますようお願いいたします。それでは、さっそく会議事項に入ります。

まず、長野県の「山の日」の制定等につきまして、これまでの経過も含めまして、事務局から説明を願います。

事務局（有賀秀敏長野県林務部森林政策課長）：（資料説明）

座長：ただいま御説明いただきました内容につきまして、御質問等ございましたらお願いいたします。

いかがでしょうか。質問等ございませんか。

それでは早速ですが、意見交換に入りたいと思います。

意見交換に先立ちまして1つ御提案させていただきますが、この会議は様々な御意見が出されるかと思っておりますので、この懇話会として皆様からいただいた御意見を全て県にお渡ししたいと考えております。

また、様々な分野の方が御出席されておりますので、御意見が対立するといったこともあろうかと思いますが、その御意見等につきましても、両論併記することで県にお渡しするというにさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。（賛同）

座長：はい、ありがとうございます。

これから意見交換を行ってまいります。今日は、様々な分野から御参加いただいておりますので、まず自己紹介を兼ねまして、山に対する思いや関わりに加え、資料等を踏まえた、長野県独自の「山の日」を制定することに対する賛否等についてお話をいただきたいと思います。

後ほど皆様方に御議論いただく時間を設けたいと思いますので、自己紹介は手短かにお願いできればと思います。

赤沼健至さん：北アルプス山小屋友交会の代表を務めている赤沼と申します。

山小屋友交会は、燕山から乗鞍岳までの森林限界を超えたところにある山小屋の組織で24施設17業者が集まった団体でございます。

そのうち、燕山荘という山小屋を経営しております。よろしくお願いたします。

森林限界を超えたところでは、だいたい10月から6月は雪が降り、雪が降るといことは、全く冬山ということでございます。

現在、私どもの山小屋では、大勢のお客様に対し、滑落停止の訓練をやっています。従って、アイゼン・ピッケルがなければ登れない状況でございます。

この「山の日」というものの捉え方については、様々な考えの方がいらっしゃるでしょうが、山小屋友交会としては4月から9月の間に春夏秋があり、それによ

で登れる、それ以外のときには遭難する確率が高くなるということで、ぜひとも「山の日」というのは7、8、9月の間でお願いしたいと思います。

ちょうど7月10日に芽吹きがやっけてまいります。そうしますとライチョウが生まれます。7月10日頃に桜が咲きます。

春山というものは里で桜が咲くから春と呼んでいます、山小屋のある場所では、ゴールデンウィークの上旬では1年中で一番雪の多い「冬山」であり、そうしたことが、ほとんどの方が認識されていないと思います。

従って、アンケート調査では制定期日として「5月」が多いとのことですが、これは里から見た「山」というように捉えており、山の「てっぺん」にいるものとしては、登山として非常に危険な時期が、この5月、6月ということでございます。

それから10月になると雪が降り、低体温症になる確率が、ものすごく高まります。4、5年前にトムラウシの事故も7月16日に発生し、たった2時間で、低体温症でお亡くなりになられてしまいました。

こうしたことを考えると「山の日」は、暖かくなった7、8、9月の間で考えていただければと思っております。

日本アルプス（北アルプス、南アルプス、北アルプス、中央アルプス）は、ウィリアム・ガーラントが「日本アルプス」と名付けたことに始まりました。

ウエストーンは、3度も、イギリスから大変な時間をかけ、軽井沢から歩いて松本を越え、槍ヶ岳や北アルプスに登っています。

それほど世界から見ても北アルプスは、きれいな所であり、ぜひ世界にも発信していくことができるような「山の日」になっていただければと思っております。以上です。

井上のぞみさん：はじめまして、井上のぞみです。

一般の女性として、特に登山家ではありませんが、長野県生まれ松本育ちで、信州の自然と山が好きという形で参加させていただいています。

元々看護師をしており、学校登山などで付き添いをしていたり、両親が山好きなので幼い頃から山によく連れていってもらったりしていました。

最近では山関係で映像を撮らせていただいたり、また女性の山関係の雑誌で、仕事をさせていただいたりしています。

女性ならではの山への関わり方、自然のあり方について一緒にお話しさせていただけたらと思っています。

よろしくお願いたします。

牛越徹さん：大町市長の牛越と申します。

大町市は、北アルプス後立山連峰の麓にあり、北アルプス一番街と自負しております。山岳文化都市を宣言して、もう10年になります。また、市立山岳博物館は昨年創立60周年を迎えました。山岳図書資料館も併設しております。

そうしたことから、長野県市長会としての立場で出席させていただいております。まず、山の恵みを考えたときに、やはり森林と山登りの2つの軸があると思いま

すが、私は、自分自身も先週、針ノ木岳の開山祭である慎太郎祭に参加し、雪の上を頂上まで登ってまいりましたが、山登りというところに軸を置いて長野県「山の日」というものを考えたらいかがかと思います。

実は、長野県市長会でも昨日、東京で全国市長会があり、長野県市長会が提案した「山の日」を、国のレベルでも制定するように検討してほしいと意見を出し、昨日のうちに採択をいただきました。

先ほど赤沼さんからお話がありましたとおり、「山の日」として考えたときに、長野県において高山に登るということを頭に置いたときに、天候が安定しているのは、やはり梅雨明け10日間、つまり7月の中旬以降が望ましいのではないかと、思います。

また、山の意義というものをよく考えていく、行動していただくには、やはり祝日であるということが望ましいと私は考えています。そうしますと、今、海の日が7月第三月曜日となっており、これに併設することによって、土日月火、あるいは金土日月といった4日間の、春のゴールデンウィーク、秋のシルバーウィークに並ぶ、ブロンズウィークというような、7月にまとまった連休があれば山に親しむ良い機会になるのではないかと、思います。よろしく願いいたします。

垣内雄治さん：私は日本山岳会信濃支部で総務を担当しております。

支部長も副支部長も、本日所用で出席できないので代理で出席させていただきました。

私は山というものは、子供の頃は里山で遊んで、成長するに従い、尾根の向こうは何だろう、何があるだろうといった高揚感から、だんだん登山を始めます。

最近、登山に加え、ボランティアで、霧ヶ峰の自然保護活動をしております。「山の日」は、いつがいいかという課題ですが、私どもは毎年6月第一日曜日に上高地でウエストーン祭をしております。

ウエストーン祭自体は全国的に浸透していると認識しており、私どもの本部では6月第一日曜日の頃に「山の日」を、という考えを持っております。

私どもも「山の日」というのは登山というだけ、と考えず、自然と山とで考えれば、我田引水かもしれません、私どものウエストーン祭やあちこちの開山祭というものもあるようですので、その辺が大いによろしいのではないかと考えております。

また、山岳会等の団体だけでは、宣伝等には限界がありますので、実際にさあ、やるぞ、ということになれば、県や市町村などの自治体に、協力を依頼するところが大いにあると思っています。以上です。

神谷圭子さん：北アルプスで蝶ヶ岳ヒュッテと大滝山荘と2つの山小屋を経営しております神谷と申します。

この長野県の「山の日」の時期に関しては、資料を見させていただくと、新緑や山開きなど、様々なイメージがあるとは思いますが、解釈が本当に多様化しておりまして、どのサイドの言い分もわからないではないと認識しております。

ただ、ある程度は意識を統一させていくような方向を作っていくべきと考えてお

ります。

木谷功七郎さん：北アルプス登山案内人組合連合会の事務局やっております木谷です。

よろしくお願いします。

北アルプス登山案内人組合連合会は、北アルプスを取り囲んでいる観光地、いわゆる松本から白馬・小谷までの5市村の8組合があり、山を取り囲んでいる全ての組合が加入しております。昨年までで350名ほどのガイドの登録がございます。

私の「山の日」への思いとしては、小さい頃から山菜採りやキノコ採り、狩猟など、山全体を楽しみ、利用しながら一緒に過ごしてきたような感じもあります。

ガイドとしては稜線3千m級の山を案内することが多い状況ですが、山のてっぺんから、里山の小さな植物の案内まで、全てを受けてやっておりますので、できましたら、信州の「山の日」としては、そうした里山の低い山から稜線にかけて全体を含めたような「山の日」が必要ではないかと思えます。

私の近辺を見ましても、だんだんと山へ出ていく人が少なくなっております。

昔は、子供を含め、地域の皆さんが、もっと山へ出歩いていたように思います。

そういうきっかけ作りになるような「山の日」にしたい、と思えます。

それから、もう1点、登録しているガイドが350名ほどおりましても、年配の案内人が年々減少しており、その方達が持っておられる知識や経験、自然を利用する要領といったことが、徐々に失われていくことを危惧しており、また昨年度から県の認定する登山案内人の講習の条件や試験も厳しくなっており、年齢を理由に厳しい研修を避ける方もおり、減少の拍車をかけるような原因になっていると考えており、もう少し緩和できないかといった御相談もしたいと思えます。

神津長生さん：長野県中学校長会の神津と申します。

学校現場の立場からすると著名な山だけではなく、学校の近くの里山まで含めると児童生徒にとっては、山というのは切っても切れない生活の一部であり、学校の子供たち生徒にとっては、言ってみれば1年中が「山の日」といえる状況でございます。

そうした意味から考えますと、山というものは、子供たちにとって、本当に大切なものでございますし、先ほどいただいた資料の中を見ましても昨年度の例で、小学校においては登山学習が前年21.7%、中学校では86%と、ほとんどの学校が高い山に登っているという現状でございます。

シンボリックな1日の「山の日」の制定も大変大事ではございますが、日ごろの子供や生徒との山との関わりをどうやって持たせたらいいか、というようなことも、これから現場では意識していきたいなと思っております。

また、その「山の日」の中身の問題でございますが、どんなふうに学校現場として協力できるのか、そんなことも興味をもっているところでございます。以上です。

島立健二さん：八ヶ岳の山小屋等の宿泊施設32軒と駐車場の管理を行っている観光協会の会長の島立と申します。

八ヶ岳観光協会では八ヶ岳開山祭を毎年6月の第一日曜日に行っています。

ただ、これは樹林の中の残雪をかなり気にしながら会場位置を下げたりしながら考えながらやっています。また、八ヶ岳感謝デーとして8月8日をその日に制定しています。これはあくまでも八ヶ岳がトイレの環境整備で、ある程度事業が終わった2005年頃に制定し、八ヶ岳の自然への感謝と、来られる人への感謝を目的に制定した日となっています。

八ヶ岳全体としては一応、長野県の「山の日」の制定は歓迎しています。

ただし、八ヶ岳は山梨県と隣接しており、岐阜県でも8月8日が「山の日」にされておりますので、高山中心の考え方であれば隣県と協調した方が盛り上がるのではないかと思います。

なお、個人的な意見ですが、長野県で独自で行うのであれば「山の日」を1日にする必要はあるのかどうか、長野県はスキーももちろんあるので、冬の日、夏、秋、それぞれの季節の魅力をそれぞれの時期に設定してもいいのではないかと思います。

杉山紘子さん：根羽村森林組合の杉山といます。

現場の職員として働いており、半日、山に入り、山と向き合いながら仕事をさせていただいております。もともと神奈川出身で、7年前に長野に移り住んできました。神奈川から来て思ったことが、林業関係者だけでなく地域の方たちも、とても山と近い関係だと感じています。それが今まで住んできた神奈川との大きな違いだと思います。

また、子供が小学校のときに、間伐体験として町の活動に参加させていただき、森林組合側として私も参加させていただきましたが、子供たちがとても楽しんでおりまして、「山の日」ができて、そうした子供のうちから山に親しむ経験・機会ができれば、大人になったときの考え方が変わってくるのではないかと考えております。以上です。

田中勝巳さん：木曾町の田中といます。私は県町村会の立場で参加しております。

私からは、2つのことをお話ししたいと思います。

1つ目は、昨日東京で会議があり、往き帰りの電車の中で『なぜイタリアの村は美しく元気なのか』という本を読んでまいりました。

非常に驚いたことは、20年前のイタリアの農村は過疎と高齢化で悩んでいたということです。

しかし、この20年ばかり特に15年、非常に元気になり、過疎で悩むということがなくなったと書いてありました。その原因は、アグリツーリズムに取り組んだことであり、基本的には今のイタリアの農村を支えているということでした。

木曾町は、日本で最も美しい村連合に早い段階で加盟し、中心的な役割も果たしていますが、全国で49の自治体が参加しています。

長野県内では、8つの町村が参加しており、全国で一番多い県です。

私は、長野県の全部の市町村、全部の地域が最も美しい村であって不思議はないと思っています。

「山の日」もそういった、いわば地域を表現する重要な役割、要素だと思いますので、「山の日」の設定ということに大賛成です。

「山の日」だけではなく地域を豊かに、美しくし、さらには人々の心を安らかにさせるような、そういう山の存在というものをもっと盛り上げていく必要があるのではないかと思います。

もう1つは、今から3年前に名古屋市の河村市長が「木曽三川流域自治体サミット」を開催し、第1回、第2回は岐阜と愛知で行い、3回目は木曽町で開催するよう要請され、本年度開催する予定です。

このサミットを、今までのものから発展させ、木曽川三川の流域文化圏として、水源の近くの集落から、中流域の市街地、下流の漁村に至るまで、海も川も山も、価値観が循環する、あるいは一体のものだという哲学を一致させる運動を、これを契機に広げようと思っています。4月から名古屋市の水道局に相談をし、行政、NPOなどの団体、農業団体、工業、産業界など、全地域の大運動として、ぜひ発展させ、そして共に、文化を共有するだけではなくて価値観も共有する、そういう文化圏を作りたいと思っています。

「山の日」の制定が、そういう一翼を担うものになれば、と捉えています。以上です。

塚田英雄さん：信州・長野県観光協会の塚田と申します。よろしくお願いたします。

私は戸隠出身で、まさに山で生活しておりました。

観光協会の立場ということもあろうかと思いますが、私自身として「山の日」について、長野県にとって山とは何かということを個人的に考えてみました。

長野県の山に対する認識につきましては、戸隠生まれということもあり、我々の生活そのものであり、通常、「山の恵み」というものであろうと思っています。

例えば、精神的な面からみても、御嶽山や戸隠山など、昔から、山というものに対して心の拠り所という側面が1つあると思います。

一方で、長野県のほか、東北特有の話といたしまして、北アルプスなどで見られる雪形というものがあり、昔から、そこで田植えを始める時期であるとか、あるいはその山を見て刈り入れを始める時期であるとか、山を見て生活を組み立ててきたという側面があろうかと思っています。

また、水の問題というものも重要なところであり、長野県は最も水がおいしくて、これは山に囲まれていることがもたらしているものだと思いますし、現在、観光分野に携わっていますが、昨今、長野県経済の中心は観光となっておりますが、世界に誇るもの、あるいは長野県以外どこにもないものという2つの見方があると思います。

そういう意味で私どもは、どこにもないものを、という意味において、やはり長野県の山とは何だろうか、と考えると、私は長野県にとっては我々の生活そのものではないかと個人的には思っております。

「山の日」を長野県がもし制定するとすれば、「山の恵み」あるいは「山の力」といったものが少し壊されてきているのかもしれない、あるいは、その「山の力」と



いったものが弱まっているのかもしれない、と感じます。

したがって、山は我々の生活の場だということを再確認し、その山の恵みに、どう感謝していくのかということを考えていくべきではないか、と個人的に考えております。

そうした中で、山岳遭難や乱開発といった課題や、昨今、観光に非常に重要な「山の活用」の方向というものを考えていく機会になるのではないかと思います。以上です。

浜このみさん：クッキングコーディネーターの浜このみと申します。

料理研究家と御認識いただければ結構ですが、ただ料理に限らずに幅広い仕事を軸としてやっていきたいと思っており、このような会議に参加できるということも、この仕事冥利に尽きると思います。よろしくお願いいたします。

私は、山にあまり関係のない、どちらかといえば、一般の人の考えといったものを代表することができればいいのではないかと思っており、これまでお聞きした皆さんと視点が違う部分があると感じています。出身は塩尻市片丘で、山の中で育てております。

しかし、山の中で育っていても、意外に山のことを意識して生活してこなかったですし、とりたてて考えたことはございませんでした。

その中で、私にとって最も身近な山、故郷の山は、高ボッチ山、鉢伏山です。

こうした感覚は、ほとんどの方がお持ちではないかと思います。

さらに憧れの山は常念岳であり、自分で登ったわけではありませんが、見て楽しむ、その表情を楽しむという側面もあり、普通に生活している人は登るということだけに限定して考えない、という側面もあると思います。

例えば、臼井吉見の小説の『安曇野』の中で、そこに出てくる佐藤校長先生が、とにかく毎朝、朝礼のときに「常念を見ろ」と言った、というくだりがありますが、この精神的な部分に「山の日」に込められるといいのではないかと思っております。

また、先ほど塚田さんもおっしゃいましたが、私も「山の日」の制定の意義とは、今まで、あまり気付かなかった「山の恵み」というようなものに感謝する日、という位置づけがよいのではないかと考えています。

さらに、料理をする立場からしますと、ジビエなども「山からのプレゼント」と考えて活用できればと思っています。

なお、長野県は、「長寿の県」と言われていますが、これは標高が高いところにあるということが長寿につながっているという説があります。

もし「山の日」が制定されたならば、そうしたことから総合的に長野県というものを打ち出していくという手もあるのではないかと考えています。

あわせて、制定の期日ですが、赤沼さんから、北アルプスでは7月から9月までということをお聞きし、初めて知ったところで、一般の人は、おそらくそういう認識だと思います。県政モニターの調査で、春が多い、あるいは5月や6月が多いという結果は、こうした一般の人の認識だと思います。

そうしたことを全く知らない段階では、6月に国民の祝日がないので何か祝日が

あればいいのではないかと、という意味で6月がいいのではないかと考えてみましたが、これから、もっと深く考えていきたいと思えます。

細川忠國さん：私は長野県木連の信州木材認証製品センターの責任者の細川です。

山というものは、遠くから眺めて感動する人、また、登って触れて喜びを感じる人など、様々だろうと思えます。ただ、その山が裸山ではどうかと思っており、森があって樹木がなければならぬと思えます。

また、樹木というものは、人間が生きるために酸素を供給し二酸化炭素を固定し、さらには海の幸を潤すという、私達の生活に一番大事なものを支えてくれているものが山だと思えます。

このことを本当に理解していくということが大事だと思っておりますし、そういう中で、「山の日」を制定するということ、日を決めるということよりも、何をするかということ、皆さんとしっかりと議論をして、民意のもとに一人でも多くの皆さんに呼びかけて議論することが大事なことだと思っております。

そうした意味で、期日はいつでもかまわないと思えますし、何をするかということ、皆さんと共有していきたいと思えます。以上です。

松沢貞一さん：北アルプス北部山小屋組合代表の松沢と申します。

私達は、北アルプスの大町から北、新潟県の蓮華温泉まで13事業者29施設の山小屋の組合でございます。

信州の「山の日」ということを考える場合、山は3千メートルから里山まであり、先ほどのお話の中にもありますが、森林の山と、登山の山とある中で、私は登山の立場で考えたいと思えます。

私は、白馬山荘を運営しておりますが、北アルプスでは一番早く営業を開始した山小屋で、もう百年以上になります。

そういう中で、やはり山小屋の使命は自然環境の保全と登山の安全の確保だと思っており、そういう中で「山の日」を制定する、あるいは、そういうことを考えていくということは非常にいいことだと思っております。

先ほど子供の話もありましたが、環境問題あるいは健康の問題、それから教育の問題と山は非常に深くかかわっていると思えますので、そういう意味で「山の日」を制定していくことはいいことだと思っております。

また、「山の日」を考えたときに、イベントなど、花火を打ち上げるといったことも大切なことですが、その日を契機に地道に山を考える、そういう日にしていただければありがたいと思えますし、そういうことがきっかけで信州の人、あるいは、ほかの方々も山について考えていただければ、「山の日」の意義が出てくるのではないかとと思えます。

具体的な期日につきましては、先ほど赤沼さんがおっしゃったように、10月から6月までは、冬山ですので、やはり7月から9月の間にしていただければありがたいと思えます。以上です。

水本正俊さん：長野県経営者協会の水本です。

個人的には、山に関しては、県民のアンケートにあったように、昔はスキー、子供が幼い頃には、よくスキーに行きました。

最近、やはりスキーは御無沙汰しており、山菜採り中心となっております。

今年の6月の山田牧場の上の方にネマガリを採りに行きたいと思っておりますが、行くたびに、竹やぶの中がゴミだらけで、よくこれだけ荒らしていくものだと、感じています。

山菜も採りに行きますが、タラノメが根こそぎ採られ、最後の芽まで摘まれ、翌年枯れているというような状況でございます。

「山の日」の制定については、平成9年の県議会の質問から15年も経ち、なぜ今なのかと疑問に思う一方で、もっと早く長野県が率先して「山の日」を作るべきではなかったかという気持ちもあります。

経済界を代表して申し上げますと、昨年4月に経済4団体が阿部知事に「国民の祝日『山の日』の制定実現運動の参画に関わる要望」というものを提出しようという動きがありました。

しかし、これと同時に、「日本酒で乾杯しよう」と「エネルギー問題」についても要望事項として検討した結果、喫緊の課題として「エネルギー問題」を優先することとなり、実現には至らなかった経過がございます。

従いまして、経済団体4団体とすれば、「山の日」の制定については賛成であり、できれば祝日化を要望するものです。以上です。

宮本義彦さん：私はこの山の東側の豊野に住んでおります、長野県山岳協会の宮本でございます。よろしくお願いします。

手身近に申し上げますが、「山の日」については、どういうことでやるのか、いつにするのかといったことが課題だと思っておりますが、それ以上に問題なのは、こうした趣旨のものは、県民が喜んで「山の日」を制定するということがないと本当の意義は湧いてこないと考えており、それをここでぜひ議論していただきたいと思っております。細かくはまた後で申し上げます。

山本佳子さん：長野市民新聞で大人向け子供向けに映画を紹介させていただいている山本佳子と申します。よろしくお願いします。

私は東京の足立区出身ですが、志賀高原に住む夫と結婚して長野県に住むようになりました。東京生まれで東京育ちなので東京が一番好きだ、雑踏も好きだし人工的なものこそが一番美しいと思っておりました。

従って、初めて長野県に移り住んだとき、あまり深く考えもしていなかったため、とんでもない所に来てしまったと思えました。

そうしたとき、遠くの方に、雪をちょっといただいた山が見えたとき、それだけは「ここに来て、この山を見られることは素晴らしいことだな。」と母に話したことを覚えています。

私でさえこうした思いがあるので、日本中、あるいは世界中で、人間として根底

に山というものへの憧れや、見ることで安心する気持ちなどといった感覚は、人間全部に共通するものではないかと思っています。

今回の「山の日」の制定ですが、私は、これだけ山が素晴らしい県なので制定した方がいいと思います。

資料を見ると、他県では冬に制定している例がないので、山に関係する業界からすれば、長野県では冬季オリンピックもありましたし、長野県が世界に向けて発信できるとすれば、ウィンタースポーツではないかと思っています。

そう考えますと12月上旬や、スキー場開きに併せて「山の日」としてはいいのではないかと思います。

一方で、海と山とは、とても関係が深いと思います。

「海の日」に対抗して「山の日」といった感覚になることが多いかと思いますが、山から流れていった水や栄養が最終的に海にそそぐということを考えれば、日本は海と山と両方の自然が大事な国だと思います。

現在の「海の日」を長野県では、「山の日」と呼ぶようにしたらどうかと思います。

先ほど海の日次の日を「山の日」という御意見もあって、それもとても素晴らしいと思いましたが、私としては、例えば出雲神話のように、日本中が神無月だというときに、出雲だけは神在月というようなインパクトがあると思います。

長野県は海の日を「山の日」とすることで、日本中でみんなにも覚えてもらえ、話題にもなることからいいのではないかと思います。よろしく願いいたします。

米川正利さん：ハケ岳山岳ガイド協会の米川と申します。

私は日本山岳ガイド協会にも所属しており、信州登山案内人も登録しております。

ガイドということですが、本来はハケ岳で黒百合ヒュッテという山小屋を経営しておりました。私は代々山小屋ですので、もう50年もこの仕事をやっており、ここが生活の場所でした。

おそらく長野県という場所は山で生活するという人が大多数だと思います。

今まで「山の日」がないということが、おかしかったのではないかと思います。

景観的にも3千メートルの山がたくさんあり、山小屋もたくさんあります。

また、スキー場もありますし、自然公園などの場所も数多くあり、本当に長野県自体は観光産業で生活していると思いますが、それで「山の日」がないということは、多少物足りなかったという感がありまして、1日だけ制定するというのではなくとも、複数の日を作ってもいいのではないかと考えております。

こういう機会を作っていただき、「山の日」を議論していただくということは私にとっては大変ありがたいことだと思っています。

渡辺隆一さん：長野県自然保護連盟の理事長の渡辺です。

長野県自然保護連盟は1972年のピーナスラインの建設のときからスタートしており、南アルプスのスーパー林道、オリンピックに伴う岩菅山のスキー場開発、八方尾根のスタート地点問題など、様々な自然を守る運動させていただきました。

ほとんど長野県の山が自然保護のメインの課題であり、当時は県民の8割以上が、

長野県の山の自然保護をしなければならない、開発よりも自然を優先するべきだという声でした。そうした県民の声をバックに運動を続けてきているところです。

一方、最近では、県民自身が意識的な意味での山離れを起こしているのではないかと感じております。

その典型的な例として、私は信州大学教育学部におりますが、学生の授業の中でも「今日、空を見たか。」と聞くと、ほとんどいない状況です。

なかなか空を見ることさえない、まして空を見なければ山は見えないということですので、基本的には、県民全体が山離れしているのではないかと思います。

「山の日」の制定には賛成ですが、「山の日」がないことが不思議だというよりも、むしろ、古くは県民の意識の中に山は染みついていたものが、逆に「山の日」を制定しなければいけないほど県民の意識の中から山が遠ざかっているのではないかと思います。

教育学部という観点で関心があるのは、学校登山が急速に減ってきているという点です。長野県のほとんどの児童・生徒は、中学校のときなどに一度は登山を経験していたものが、今では86%に減ってきています。

隣の学校がやめれば、こちらもやめたいというところが現場の先生の声だと思えますが、そうしたことで急速に山離れが進行していると認識しています。

従って、ただ「山の日」を制定しただけではすまない状況で、現実に山で生活ができなくなっていることが大きな課題だと認識しております。

長野県内で、山でも生活していけるということ、ただの理念的なものではなく、実質的なところで、さきほどのイタリアの話ができましたけれども、過疎地域やその周辺山村として、眺める山、登る山だけではなく、生活の山を取り戻さないと長野県の文化としての山が失われるのではないかと危惧しております。

長野県の良さとは、山を活かしていくことだと思います。

長野県自然保護連盟としては、長野県総合5か年計画（案）への意見を求められた際に、基本的には県はただ財産として見ているだけで、それを生かす、守ることが、きちんとできてないのではないかとこのことを申し上げましたが、「山の日」もただ制定するだけではなく、現実に今、山をどういうふうに、きちんと生活に取り戻すか、文化として打ちたてていくかということが重要だと思います。

山岳関係、登山関係者は普段から様々な民間活動をやっておられますし、山小屋の関係者も、ただ経営するだけでなく、きちんと山の文化というものを訴えてきています。

これは非常にいいことで、そういうところとリンクしながら「山の日」が制定されていくことがいいのではないかと考えています。よろしく申し上げます。

小沢晴司さん：小沢でございます。中部山岳国立公園と上信越高原国立公園の管理を担当する事務所でございます。

日本中に国立公園がありますが、その多くが山岳地域と重なっており、その山岳地域は、世にいう霊場というような地域とつながっております。

霊場というのは山岳地域での自然現象が特異であるとか、先ほど塚田さんが発言

で指摘されましたとおり、山里の主演の生業を支える基本的な存在である、というようにことに対する信仰がベースになっているのではないかと思います。

このことについて非常に端的に表す有名な歌がございます。

『後撰集』の読み人知らずですが、「わだつみの 神にたむくる山姫の ぬさをぞ人は 紅葉といひける」。

これは三陸の復興に、「森は海の恋人運動」を行っている畠山重篤さんの好きな歌であり、そのような古い方々の認識や知恵を学びながら、「山の日」のあり方というものも、私も皆様の意見を聞いて勉強したいと思っています。

宿利一弥さん：中部森林管理局の宿利と申します。

私も中部森林管理局では長野県、富山、岐阜、愛知4県にございます林野庁の所管の国有林を森林管理させていただいております。

県内に森林管理署という組織を置き、高い高山はもちろんですが、その麓に広がる森林の管理をさせていただいております。

私は、この「山の日」についての懇談ということで、様々な幅広い方々が御意見を交わすということは非常に有意義なことだと思っており、また、県独自で「山の日」の制定に向けて発想されるということは非常に素晴らしいことだと思っております。

また、山岳・山小屋関係者だけではなく、身近な生活の場である里山までで考えますと、山村地域の振興など、中山間地域と言われるようなところの広がりが必要だと思っております。

ある民俗学の書籍では、集落である「ムラ」の周辺の農耕地が、野良仕事の「ノウラ」であり、さらにその周りに昔だったらカヤを採ったり、山菜を採ったりという風景が「ヤマ」というものであると書かれております。

この「山」という言葉に対する思いが、お集まりの関係者の皆さんでそれぞれお持ちだと思いますが、できるだけ広い方々に賛同されるような形で議論されることが望ましいと思っております。

いろいろと勉強させていただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

座長：私もお話をさせていただきたいと思っておりますが、実は私、生まれが山形県です。山形県には海もありますが、海の方でなく、内陸地方とっておりますが、寒河江というところで高校までおりました。

寒河江は、月山や奥羽山脈、朝日連峰に囲まれ、毎日毎日が山との暮らしでございました。子供の頃は、冬になると祖父とキジ撃ちやウサギ捕りをし、それを食べておりました。

今は山岳科学総合研究所で仕事をしておりますが、信州大学で「山岳科学」と呼んでいるのは高い山だけではございません。

山岳というと、なんとなく高い山というイメージがあるかと思いますが、里山それから信州そのもの、あるいは長野県そのものが、もちろん海がありませんので、長野県全域を含めて全てが山岳だろうということで学問の対象にしているところで

ございます。

皆様方のお話にもございましたが、山というものの1つは、私もそうですが、子供のころずっと見てると宗教的な意味ではなく、やはりなんとなく安心する、心の安らぎの場でもあると感じております。また、日本は周りが全部海であるため、海洋国家というような言い方もありますが、2/3以上が森林であり、山であるということであれば、山岳国家であるといってもよいのではないかと考えております。

森林は、食糧を我々に与えてくれるような恵みもありますが、それだけでなく、森林あるいは山があるからおいしい水が飲めるのです。

また、単に水だけではなく、御指摘のとおり、森林は二酸化炭素を吸収して酸素を供給してくれるといった働きもあります。

さらに、塵やほこりも、実は山あるいは森林がトラップしてきれいにしてくれるという役割もあります。

海から蒸発した水蒸気から雲が湧き、大きくなることで雪や雨を降らせやすくなり、雪や雨を降らせるその途中で大気中の塵やほこりをトラップして落ちてきますので、まさに山があることによって空気が非常にきれいになる仕組みがあります。

従って、信州は山に囲まれておりますけれども、例えば東京や中京圏等では、信州に山があるからこそ、おいしい水が飲め、おいしい空気が吸えるということ、信州の人々はもっと自負をしてもいいのではないかと考えております。

一方で、山と海の関係ですが、一般的には、山から海に向かって、例えば養分が流れていき、海産物が採れたり、山から土砂が流れていくことで美しい砂浜ができ海水浴場ができたりといったこともありますが、実は山も海がないと成立しません。

つまり、海から水が蒸発して雲を作り、雪や雨を降らせるという、そうした水の循環がなければ、山の上には水がありません。

従って、我々生き物は全て水が必要ですから、高い山まで水を運ぶためには、地球のシステムとしての水循環が必要で、その源は、海であるということにもなります。

つまり、海から蒸発した水が、雲となって雪や雨を山に降らせることで、そこから流れはじめ、途中途中で森をつくり、田畑を潤し、海へ流れ、また雲となって山へ戻るという循環が起こるということで、海と山は対立的な話ではなく、一体として考える必要があると考えております。

そうした観点でみると、先ほどお話しがありました、海の日があるのにどうして「山の日」がないのか、ということがよく言われますが、考えようによっては「山と海の日」の方が、正当ではないかと個人的には思っております。

ただし、期日の御提案のありました7月がいいかどうかという課題など、山にはいろんな側面がありますので、単に1日だけで済むのか、月間や週間といったことも必要ではないかと考えており、このような部分は、我々大人だけの感覚で考えてはいけないのではないかと考えています。

教育分野に携わっておりますので、次代を背負う子供たちが参加したり考えたりすることができるようにするべきだと思っており、制定するのであれば、ぜひ、子供たちが小中高から参加できるような日程にすべきと思っております。

さて、皆様からのお話をお聞きしますと、この懇話会の中では「山の日」を制定するのに反対という方はおられないという認識でよろしいでしょうか。（異議なし）

座長：県民へのアンケート調査では6%の反対という方がおられましたが、その中でも、主旨がしっかりしていればという御意見がありました。

そうした御意見を踏まえ、ここからは制定することを前提に進めさせていただこうと思います。

本日の会議では、主旨や目的などの制定する理由等について、県民の皆様にもわかりやすく訴えられるようなものという観点で御意見・御提案をいただければと思います。

それに伴い、期日をいつにするべきかという点もあろうかと思いますが、最初に、主旨や目的等について自由に御発言をいただければと思います。

宮本義彦さん：長野県山岳協会は日本山岳協会の下部組織であり、全国組織の日本山岳会が大いに推進するとしている段階ですので、我々も大いに進めるところが基本の立場です。

「山の日」については、どうして「山の日」を制定するのかということだろうと思います。山というものをどのような範囲で捉えるかということもありますが、「山の日」を長野県の「山の日」と考えるのか、それとも全国共通の「山の日」ということで考えるのかによっても非常に変わってくるとおもいますので、その点も議論しないといけないのではないかと思います。

他の祝日の定義にならえば、日ごろ長野県にいて「山のありがたさ」がわかりにくいため、そういうことに感謝する日、といった、山の恩恵に感謝する日ということが一番だろうと思いますが、それだけでは、意味としては弱いのではないかと思います。

特に長野県で考える「山の日」については、具体的には、山岳環境を進んで保全するあるいは保護する、といった観点が必要であり、加えて山に親しむという観点も重要です。

こうした観点を十分含めて、先ほどお話のありました、小学生でもわかるような言葉づかいの意義を明確にすべきだと思います。

なお、期日をいつにするかという問題ですが、全国的な「山の日」ということを念頭に置いて考えるのか、それとも信州独自の「山の日」と考えるのかで大いに変わってくると思います。

資料にもあるとおり、既にいくつもの各県が「山の日」を制定しており、これらの府県は変える必要がないから楽だと思いますが、長野県はまだできていません。

一方で、国全体で進めようということがありますので、そうした情報も事務局であれば提供していただいて議論に入った方がよいのではないかと感じております。

総じて、広く知ってもらおうということが必要であり、自分たちが参加する「山の日」というイメージを抱いております。



事務局（有賀森林政策課長）：それでは、参考資料を御覧ください。

4月に超党派の国会議員による「山の日」の制定の取組がスタートした、と申し上げました。

その前段に、昨年来、山岳団体の方々による全国統一の「山の日」制定の動きがある中でこのような取組につながったと認識しております。

期日につきましては、新聞報道等では「6月第一日曜日」といった話があり、昨年10月に開催された山岳5団体の会議の中でもこうした話題がありますが、私どもが把握しているかぎりでは、「6月第一日曜日」は、ひとつの候補であり、今後広く国民の皆様方から声を聞く場を設けながら検討していくと聞いております。

期日をいつ頃決めるのかというスケジュールは把握していない状況で、超党派の議員連盟の話の中では、できれば早期に「山の日」の制定に関する法案を国会に上げていきたいとのことのようなのですが、具体的にはみえていない状況です。

従って、本日の懇話会で議論していただいている長野県独自の「山の日」と、全国統一の「山の日」の検討スケジュールは、必ずしも一致するものでないと認識しております。

その上で、国の情報は適宜確認してまいります。県と国との調整ができるものかどうかという事に関しては、そうした性格のものではないのではないかと考えております。

座長：おそらく国の動きを先取りすることもあるでしょうし、国に対して要請することもあるでしょうし、県としては、国の動きに囚われず、県独自に取り組んでいく日あるいは週間といったものをつくっていくということで御議論いただければと思います。

井上のぞみさん：長野県の観光などの仕事にも関わっており、長野県の山の名前について同年代の人に聞くと、山があることは知っていても具体的な名前となると答えられず、漠然とそこに山がある、というイメージだと感じています。

新聞記者の友人が行ったアンケート調査では、そこに住んでいる人達は生活の場として、山があることは分かっていますが、それがあまりにも自然で意識していない、という趣旨の結果であり、私達の世代にはそうした感覚があると思います。

つまり、「長野県」だとか「自然」というものが好きかどうかということも聞いても、当たり前だから特に意識もせず、好きかと言われても明確に意識していないという感覚が、20代や30代の人には多く、その人達が例えば子供を持ったときに、あるものをそのまま、特に子供に教えるわけでもなければ、子供たちは、ただ山があるということにしか意識していかなくなってしまうのではないかと感じています。

私の両親は山が好きで、山の名前を知っていますが、その世代以降の30年ほどの間に、世の中が便利になり、テレビゲームのように、なんでも自分たちが受け身の存在といえますか、山や自然の中で自分たちが自発的に探さなければならなかった時代とは変わってきており、なんでも与えられて生活していく中で不自由さを感じない世代が私達の上の世代あたりから子供たちの世代にまで続いてきていると感

じます。

こうした部分をどこかで意識改革していかないと、このまま長野県の良さというところが、ただ漠然としたままうやむやになってしまうことがもったいないと思います。

従って、単純に長野県が好きだということをお子たちに感じてもらえるようなPRなどをしていくべきではないかと思えます。

座長：御指摘のとおり、長野県だけでなく、日本人そのものが、自然のありがたみというものを、あまり感じないのではないかと思います。

不自由しないからかもしれませんが、暑くとも寒くとも普通に生活できるくらいの気候で、水はたくさんあり、空気はうまい、何の苦勞もなく食べ物も得られるということが、自然のありがたみを感じない理由かと思えます。

そうした事を念頭に、「山の日」を設けたときに、どういう取り組みをするのかと、県民の皆様に、「山は大事に」と口だけで言っても理解は進まないと思えます。

大事だとすれば、具体的にこういうこともしなければならぬ、いうことをしっかりと訴えていくことが大事だと思います。

牛越徹さん：私も山が大好きで、登山のほか、スキーやスケート、山菜・きのこ狩りも楽しんでます。普段から、こうしたことに親しんでいて「山の日」という話が出たときに、やはり信州はこれだけ豊かな自然、山がある以上、山の恵みということについて、広く考えてみるということが大切だと思います。

そうした意味で自然の恵みに感謝する、あるいは考える、あるいは実際に親しんだりする、体験したりする、あるいは観光産業という面でいえば利用する、そのように考えていかなければいけないと思えます。そういうときに、前述のとおり、考え行動すべきと申し上げましたが、全員が実践できるわけではなくとも、今度の「山の日」には山に足を延ばしてみようか、という実践することが取組の1つだと思います。

それに至るまでの「山の日」の意義ということについては、長野県民ですから相当、県民的な議論をしっかりと重ねていくことが大事だと思います。できてから普及啓発をすることも1つの方法ですが、できるまでに、様々な議論があってはじめて関心も高まると思えます。それをまず一番大事に考えていきたいと思えます。

加えて、行動する、実践するという意味において祝日が望ましいと考えており、できれば「海の日」の前後に新たな祝日を設け、まとまった日数で休暇が取れるようにすることを、山岳観光県として考えたらどうかという提案をしましたが、祝日とするには国の動きは極めて重要だと思います。

長野県が独自に日を決めた後に、国が祝日を伴うような違う日に「山の日」を設けたとすると意義が薄れてしまう、拡散してしまう、そうした恐れがあると思えます。

そこで、はじめから国の制定を待つのがいいのか、国の動きを念頭におきながら先ほど出たように、そもそも「海の日」に重ねる、あるいは国が決める「山の日」

の近接の日曜日や月曜日に制定するといった作戦を考え、どこに落ち着いても長野県民にとって大事な「山の日」になるように、相当慎重かつ大胆に考えていく必要があるだろうと改めて思います。

赤沼健至さん：山は、親子三代で楽しさを共有できる素晴らしいスポーツだと思っています。そうすると親子三代で楽しむためには夏休みの時期が非常に大切ではないかと思っています。

私の友人をはじめ、山に登っている人に、なぜ山が好きなのかと聞くと、小さいときから両親と山に登ったからと答えます。

この関係がないと、子供が成長し、信州から外に出たときに信州の山の魅力、いわゆる信州の魅力というものが伝わらなくなってしまう可能性があるのではないかと思います。

私どもも、長野県の中学校の集団登山が、ある時期には燕岳がメッカになっていましたが、今から10年ほど前に、もう山へ登るのは嫌だと、もう二度と登りたくないと言われました。

どうしてそうってしまったのか考えると、様々な方面から山のつらさなどをマイナスの面で言われてきたと非常に多いと感じており、そうすると、幼いときから山は楽しいものだとして教えていくことと大きな差が出てきてしまいます。

長野県では、県歌「信濃の国」が、祖父の世代からも孫の世代でも歌え、その冒頭では、山から始まることを考えれば、長野県の財産として、「山」があると思います。それを大勢の人達で、全国の人達に魅力を伝えるためにも、子供達に山の魅力を伝えていくことが重要なことではないかと思しますので、夏休みを迎える7、8、9月の間で制定されることを期待しています。

島立健二さん：北アルプスに関わる方には7月から9月という時期が良いといいことですが、標高2,500mを超える山が長野県の場合普通にある一方で、全国的には富士山や日光、白山など限られています。

御提案のあった7、8、9月が、確かに山のシーズンにはちょうどいい頃ですが、他県では、その時期は暑すぎて、あまりいい時期ではないのではないかと思います。

ハヶ岳でも6月初旬では雪があり、いい時期ではないですが、全国的な事を考慮すると6月初旬に制定されてしまうのではないかと思います。

そう考えると、全国统一の日と合わせるということではなく、長野県は独自に「山の日」を制定した方がやりやすいのではないかと思います。以上です

杉山紘子さん：林業に関わっているものとして、できれば「山の日」の中に林業という面も入れていただければありがたいと思います。

山歩きをして素晴らしいと思う方もいれば山の中に入って山菜を採るのが楽しいと思う人もいて、それはたぶん人それぞれ違ってくると思います。

その人それぞれが山の魅力を、何かしら見つけてもらうことが、一番「山の日」の意義としていいのではないかと思います。

様々な方面から見て、山歩きは難しいけれど、山菜採り、あるいは林業はおもしろいといった、多面的な考えも必要だと思います。

山本佳子さん：長野県の方は、アピールが下手だと思います。

一方で、長野県は、人が真面目で勤勉だということところがすばらしいところだと思います。

だから、例えばりんごは、私の知り合いの青森の方でさえ、長野県からりんごを取り寄せて食べるくらい、長野県産がおいしいとおっしゃいます。ぶどうも、ぶどうと言えば山梨と言われますが、長野県産のぶどうの方がおいしいと思います。

何か足踏みをしている間に先を越され、いつも二番手に甘んじるという感じがします。

長野県のすばらしさは人柄だと思います。真面目な人柄です。

こうしたことを踏まえ、「山の日」の取組として、他県の例を真似るのではなく、子供たちへの教育として、山との関わり方をしっかりと教え、その子供たちが長野県から出ていったときに長野県民としての誇りに繋がるような、例えば、都会の人達がきれいな空気が吸える、あるいはおいしい水が飲めるということは長野県の誇りであるということを経験の中に活かすきっかけになる日にしてはどうかと思います。

渡辺隆一さん：いくつか自治体の首長さんがいらっしゃいますが、県が「山の日」を制定することに対して、長野県の市町村も一緒にやっていただくことが必要だと認識しています。大学もそうですが、どこでも行政が忙しくなっている中で、県が「山の日」制定したから、「山の日」に行事を1つやるというだけでは、物足りないと思います。

長野県の市町村が全部「山の日」に、その日とは限りませんが、全部の市町村が「山の日」に関して村民町民の登山の会だとか、地区の山に登るといった行事ができる体制が整うと、非常に大きなことだと思います。

一方で、実際には各自治体も忙しいと思いますので、「山の日」は迷惑だと、その本音を聞かせていただければと思います。

牛越徹さん：大町市は、信州の山の麓ですし、ただでさえ山に関するいろんな行事をやっておりますので、県が決めれば輪をかけてやろうと思っています。

県内で、いずれのところで、いろんな催しやるにしても、全て長野県内の市町村で行われることですから、当然市町村も当然連動していくということになるかと思っています。

ちなみに、大町市では、先ほども話題にありましたが、子供の頃から身近な高山に親しむということを、率先してやっています。私の母校、大町高校は、昭和23年から全校登山をやっており、今年で65回目になります。

赴任してくる先生には、それがあから嫌だとおっしゃる方もいらっしゃるようですが、私も3年間で2回参加しており、そうした結果、山に親しむ素地ができた

と思います。山の大切さも勉強したと思います。

従いまして、県の取組に市町村も一緒に働きたいと思います。

渡辺隆一さん：一部の小中学校では、学校登山は危険だと思われており、推進しようとしてもなかなか進まない現状もあると聞いています。

そうした場合、学校だけの取組ではなく、市町村や山岳関係団体が協力して取り組むといったことも理想的ではないかと思います。

杉山紘子さん：根羽村は、村として林業を主軸産業として興していこうという考えがあり、地域の方々や、実際に林業に携わっていない方も興味をもっていておられます。例えば、山主さんに山の仕事をさせていただきたいということをお願いすると、山主さんの方から、こうしてほしいというアドバイスをいただける関係ができています。

渡辺隆一さん：県が主導して「山の日」ができれば、市町村も「山」に関する取組がやりやすくなるという関係が大切だと思います。

田中勝巳さん：木曽町にも、木曽駒ヶ岳、御嶽山という、県歌「信濃の国」に出てくる山が2つもありますが、登山の楽しみやスポーツとしての高い山はもちろんのこと、この資料にもある、「うさぎ追いしかの山」のような山の価値という部分を、どう一致させるかが難しいのではないかと思います。

私は、ここに見える山も長野県中に広がる全ての山が、景観をつくり、田をつくり、海を豊かにしていると思いますので、日本を支えている山、日本の国土を支えている山というイメージを踏まえて捉えるべきと思います。

座長：皆さんのお話をまとめると、基本的には「山の恵み」ではないかと思います。

食べ物もそうですが、水や空気、登山をするにしても山があるから登れると考えれば、それも恵みであり、いろいろな「山の恵み」があろうかと思います。

そういった側面をぜひ子供たちにも伝えようというアピールの仕方がいいのではないかと思います。

そうした場合、その恵みを持続させるためには、環境保全というような側面も必要だろうということになり、まさに山は、これだけ大事なものだから、これだけのことをしようという繋がりがあろうかと思います。

全て「山の恵み」に、通じるとは思います、いかがでしょうか。

木谷功七郎さん：私は国の「山の日」とは別に考えていくべきだと思います。

その「山の日」の対象も、高い山はもちろんですが、私の家を出て20mほど行くと小さい林に至る環境ですが、市街地に住んでいる方でも玄関を出れば山並が見えるといった光景が長野県の日常の風景だと思います。

私も観光業に携わっていますが、都市部から来た中学生の体験学習に参加すると、

田植えや山菜採り、山の遊びなど、かえって地元の子供たちの方がやっていないようなことを体験しています。

そうした現状を踏まえ、高い山とともに里山から自然を楽しむ、一步外へ出ようというような取組からやっていけばいいのではないかと思います。

また、県で1つに決めていただくということでもよいですが、毎年いろいろなテーマがあって、それぞれ違うテーマでやっていくということもいいかと思います。

「山の日」の内容については、長野県はやはり暑いところ寒いところなど、いろいろありますので、その地域の特性のある親しみ方を提唱していけばいいのではないかと思います。

神津長生さん：次世代を担う子供たちに、山の恵みへの感謝や自然環境への気づきだといった、きっかけの日になればというお話がありましたが、先ほど冒頭の自己紹介でも申し上げたとおり、学校はこういう1日ということではなく、1年間、様々な行事や学習の活動を通じて、山と触れ合い、山に感謝し、あるいは山の恵みを味わったり、山に登ったりということをやっています。

そうした事を考えると、むしろ中身として、例えば資料②の9ページにあるように、自然観察会や、イベント、写真や絵画等のコンクールなど、いろいろな取組がありますが、こうした取組に結びついてしまうと、感謝だとか自然環境の気付きということができないのではないかと思います。

子供達に一番身近にいる立場として、こうした取組の一環として、児童を対象としたポスター募集などを夏休みの宿題にするといったことが想定されますが、学校教育の現場にそうした時間はない状況です。

せっかく「山の日」を制定しても、こうした取組が中心では意味がなくなってしまふように感じます。

また、現実的な問題として、先ほど渡辺さんから登山が減っているというお話がありましたが、ある中学校では引率をする登山の平均年齢が50歳を超えており、とても安全に何百人もの子供たちを連れていくことは厳しい状況にあるという側面もあります。

一方で、私が以前勤務していた学校では、浅間山登山の際に、学校独自のカリキュラムとして地元の山と触れ合う機会をとっているところもたくさんあります。

座長：確かに「山の日」を契機に、新たに取り組むということではなく、これまでに学校教育の中で既に実践されていることもたくさんあると思います。

その一方で、学校現場の山への取組に対して特別の補助をするといったことはあるのでしょうか。

もし「山の日」制定するのであれば、例えば、それに付随して、長野県にある学校には山に対するいろんな取組を啓発するための予算といったものがあると将来的にはいいのではないかと思います。いかがですか。

事務局（茅野繁巳長野県教育委員会スポーツ課長）：学校の行事、あるいは野外教育と

いうところに対する予算措置については、資料を持ち合わせておりません。

牛越徹さん：県の教育委員会の現地機関として、大町市に山岳総合センターがあり、学校の先生などを対象に、登山をはじめとする専門的かつ高度な技術に関する講座を開いていただいています。

なお、学校の先生だけではなく、昨今問題となっている山岳遭難事故の原因の1つに、山岳会などに属していない人が専門的な技術が足りないために事故を起こすケースが目立っておりますが、そうした山岳関係の団体に加盟して、技量を高めていこうという普及啓発活動も、このセンターでやっていただいています。

事務局（茅野スポーツ課長）：学校の先生の方を対象にした取組はただいま御紹介いただいたようなことですが、子供たちの野外教育に対する支援については、ここでは承知をしておりません。

牛越徹さん：学校に補助金を出すよりも、指導者の意識を高めることの方が効果は高いのではないかと認識しており、御紹介いたしました。

座長：学校関係では、先生側が高齢化しているという話もあり、学校の先生は、登山の専門家ではありませんので、例えば、本日もガイドの方がおりますが、県として予算措置を含め、人材の活用などにより、学校登山を支援するような取組はいかがでしょうか。

先生だけだと先生も不安であり、専門の山岳ガイドにお任せした方がよいのではないかと思います。そこから山を考えるということもあると思います。

事務局（茅野スポーツ課長）：野外教育をはじめ、学校登山については、学校の先生が対応できないところでは山岳ガイドの皆様に依頼して実施している学校が数多くあると聞いています。

赤沼健至さん：学校の集団登山では、山岳ガイドが引率する事例が多くなってきています。各市町村の教育委員会で人材派遣や予算的な支援を行うようになってきており、非常にいいことだと思います。

米川正利さん：赤沼さんがおっしゃったとおり、安全対策の面で重要な取組だと思います。登山人口が非常に増えており、「山ガール」などの効果もありますが、現在、アウトドアショップでは、10年来、最高の売れ行きとなるほどに増えております。

これで富士山が世界遺産ということになれば、もっと増えてくるのではないかと思います。

私どもの感じている傾向としては、長野県の子供たちはなかなか登らない、一方で都会の子がどんどん増えていくという、この点で長野県の意識が高まらないとい

うことがあります。

学校の先生はもちろん、長野県、あるいは市町村で、もっと子供に対する呼びかけをすることがいいのではないかと思いますので、それが「山の日」をテーマにして始めることがよいのではないかと思います。

水本正俊さん：今、小学生の問題が挙げられておりますが、長野県人にはベースには海への憧れというものが、私を含めて非常に強いと思います。

さきほど、赤沼さんが親子三代のお話をされましたし、井上さんからも山の名前を知らないというお話がありました。私もここにいることが不思議なくらい、山登りやマラソンが大嫌いです。

ようやく年を経て、山の大切さなどを意識しはじめてきましたが、未だにバスに乗って海が見えるところに行くと「わあっ。」というような歓声が上がります。

そうしたことから、私どもも私の子供も海に憧れがあるため海に連れていく、あるいはどこかの島に行くということが中心になっています。

そういう意味で、山は、目の前に毎日ありますし、当たり前のもので、そのベースをどう変えていくかというところが一番重要ではないかと思います。

それを変えれば随分変わってくるのではないかと、思い、「山の日」の制定がそうした意味であれば非常に意義がある気がします。

田中勝巳さん：参考資料を見ると、全国統一の「山の日」の制定の趣旨が登山としての「山の日」を念頭において運動されている傾向が強いのではないかと思います。

全国統一の日が制定され、祝日化されることで休みになることは喜ばしいことですが、県が制定する意義を考えると、国とは別に、長野県は山の国だし山の幸というものに重きを置いて考え、「山」というものに、「里山」も含めて山を大切にして、そして山とともに暮らす長野県人としての意義を明らかにすることが大切ではないかと思います。

小沢晴司さん：田中さんの思いにも重なりますが、先ほどの学校教育の話でも次世代を担う子供たちにとっても「山の日」の意義というものの検討が大切だと思います。

それで、山の恵みと学校教育で非常に扱いにくい点として、「信仰」であるとか「宗教」であるといった点が考えられます。

長野県には諏訪大社の御頭祭などの山の恵みに感謝するお祭りがあり、穂高神社や戸隠、など古くからある信仰の中に、山の恵みを、もう一度思い返すようなものが、メッセージがあるとすれば、神社や仏閣からお話を聞くと何かヒントが得られるのではないかと感じがいたします。

細川忠國さん：先ほども申し上げましたが、参考資料にある全国統一の超党派の議員連盟による「山の日」の制定の目的はおかしいと考えています。

国では、海に対抗して山だという言い方をしていますが、それは手段であって目的ではないと思います。



目的をしっかりと議論し、何をするかということを含めて時間をかけて、県民に呼びかけ、山がなければ我々は生きてはいけないということを真剣に議論する必要があると思います。

座長：既に、「海の日」が国民の祝日となっており、これを「海の日・山の日」あるいは「海と山の日」とするという案もあり、超党派の国会議員連盟に対し要請していくという方法があります。

それとは別に、ここでは信州独自の「山の日」を考えるということも一つの方法です。そういう二段構えも可能かと思いますが、いかがでしょうか。

事務局（有賀森林政策課長）：この懇話会ではニュートラルな形で御議論いただきたいという趣旨から、懇話会の意見として、例えば、国の動きもある中で全国統一の「山の日」を制定するよう要請していくという御意見となれば、それを国に伝えてまいります。県としては、国の動きについても、できる限り情報提供はさせていただきますと思います。

その上で、長野県の「山の日」とは関係がないということではありませんが、長野県の「山の日」を中心に御議論いただく中で、国の動きと、例えば期日が大きく異なったり、同じであったりすればこのような期日ではないかということ、本県がはじめに議論をしておりますので、その情報を国の方に情報提供していくことも一つの方法かと認識しております。

牛越徹さん：そもそも県は、国に国としての祝日を前提とした「山の日」を制定してほしいという要請を正式に提出されておりますが、そのことと、長野県独自の「山の日」を制定したいということの間には矛盾があると思いますが、県として、その2つをどのように整合性をとるのかといったことについて、事務局としての考え方をお示しいただければ議論の集約にプラスになるのではないかと思います。いかがでしょうか。

事務局（有賀森林政策課長）：全国統一の「山の日」の議論がある中で、長野県独自の「山の日」を制定することが矛盾するのではないかと御指摘ですが、資料にもあるとおり、長野県としては古くから県議会において国に要望した経過もあり、全国知事会などを通じて全国統一の「山の日」を要望してきた経過があります。

しかし、これまで具体的な動きは見られず、ようやくこの4月に議員連盟が設立されたという状況です。

一方で、都道府県レベルでは、既に26府県で制定されており、県としては、これと並行して長野県独自の「山の日」を検討しているところです。

全国統一の「山の日」が具体的に検討され、期日の候補等が明らかにされていれば、今回の懇話会の検討方法も違ったものとなると思われませんが、そうした具体的なものが見えない状況の中で、先ほどの知事のあいさつにもありまして、長野県独自の「山の日」を検討していくことに意義はあると考えております。

こうした取組も含め、気運も高揚しつつある状況の中で、一見するとギャップがあり、矛盾しているように思われますが、県独自の検討を進めさせていただきたいという経過です。

座長：本日、皆様から頂戴した御意見、主旨、どういうことをやるかというようなこととお話しいただきましたので、事務局でまとめていただきます。

その中で、キーワードとしては、低い山から高い山まで、森林から山岳まで全部含めて、ということで山から恵みがあり、それを我々は恩恵を受けている、ということが重要であろうと思います。

皆様には、この主旨をどうするかということをお次回までにそれぞれ御検討いただくとともに、期日についても難しい課題ですが、それぞれのお考えをまとめていただくようお願いいたします。

その議論の過程で、名称をどうするか、あるいはいつにするかということも固まってくるかと思しますので、しっかりと御議論いただき、県に意見として提案したいと思っております。

司会：鈴木座長、有識者の皆様、貴重な御意見をありがとうございました。

本日いただいた御意見は、事務局で議事録としてまとめさせていただき、また後日、御確認いただきたいと思いますので、よろしくようお願いいたします。

事務局（有賀森林政策課長）：次回につきましては、委員の皆様方のスケジュールもございまして別途調整させていただきます。

塩入部長：本日は、お忙しいところお集まりいただき、大変貴重な御意見・御提案をいただきましたことに、感謝申し上げます。

また、座長をお務めいただきました、信州大学の鈴木先生には、円滑な会議運営と、御意見等の取りまとめをしていただき、誠にありがとうございました。

議論のお時間を十分にとることができなかったところもございまして、早速、本日頂戴した御意見等をまとめさせていただき、第2回の懇話会につなげてまいりたいと考えております。

結びとなりますが、皆様には、第2回の懇話会への御参加と御協力をお願いし、ぜひ、それぞれのお立場で、「長野県の『山の日』のあり方」等を御検討いただき、より大勢の方と共有できれば幸いです。本日は、ありがとうございました。

司会：それでは、これもちまして、本日の懇話会を閉会とさせていただきます。